アイルランド・ナショナリズムと Joyce の芸術理論

道　木　一　弘

序

Joyce がアイルランド・ナショナリズムと文芸復興運動に極めて冷淡な態度をとっていたことは良く知られている。Ibsen のようにヨーロッパの古い価値観を打ち破るコスモポリタンな芸術家を標榜していた若き Joyce にとって，ダブリンのアベイ座で上演されるあまりにアイルランド的な演劇は耐え難い物であったのである。だが嫌悪し無視することが関係の一つのあり方であるとすれば，Joyce を理解するためにアイルランド・ナショナリズム及び文芸復興運動を理解することはどうしても必要であろう。'The Dead' の中で Gabriel をして〝I'm sick of my own country, sick of it !"[1] と言わせた Joyce が，後にアイルランドとその歴史を自らの芸術創作活動の中で解体し，そして再構成しようとしていったことを考えるとき，コスモポリタン＝自分の祖国を捨てる事，という図式の上にあぐらをかいているわけにはいかないのである。本論文では先ずアイルランド・ナショナリズムの成立過程とその特徴を，その精神的指導者である Thomas Davis と Douglas Hyde の論文を中心に考察する。そしてその後，Joyce がナショナリズム及び復興運動の何を否定し，そこから何を生み出そうとしたのかを考えることにより，彼の芸術活動の始点を見極めたい。

I

十九世紀に大きな展開を見せるアイルランドのナショナリズムは，十八世紀後半にその萌芽を見る。アイルランド史の中でプロテスタント国家の時代と呼ばれるこの時期は，十七世紀のカソリック先住民とプロテスタント入植者の間の争いに曲がりなりにも決着がつき，プロテスタント支配者層によって構成されたアイルランド議会が不完全な形ではあったが，本国イギリスから独立した機能を与えられるようになった時期にあたる。プロテスタント支配者層はアイルランドのカソリック住民の中では少数派であり，既得権を守るためにはイギリスの軍事力に頼らざるをえない立場にあったが，いつまでも本国からの支配や命令に甘んじていたくないと考える者もでてきていた。彼らにとってはもはやイギリスとは別の，アイルランド人としてのアイデンティティを確立する必要があったのである。D. Kiberd によればプロテスタント支配者層の中にはケルト文化に関心を持ち，これを積極的に保護しようとした者もいたようで[(2)]，彼らは自らのアイデンティティを先住民の伝統文化となんらかのかたちで結び付けようとしていたとも考えられる。しかしながらプロテスタント国家の時代は，1800年の併合法によってアイルランド議会がイギリス議会に組み込まれ，アイルランドが名実ともにイギリスの植民地になってしまったことで終わりをつげ，これによってプロテスタント支配者層は大きな精神的打撃を受けることになった。だが民族としてのアイデンティティを求める動きはこれを境により先鋭化されるのである。

十九世紀前半のナショナリズムは Daniel O'Connell の併合法撤廃運動と，そこから生まれた青年アイルランド運動によって特徴づけられる。O'Connell は1829年カソリック解放法を成立させた後，併合法撤廃を要求して各地で〝Monster Meeting〟という大集会を開催するが，その最後のものが1843年10月８日，クロンターフで予定された巨大集会であった。ここで我々はクロンターフの持つ歴史的意味に注目しなければならない。それは自らをアイルランド皇帝と読んだ Brian Born が1014年，侵略者のヴ

ァイキング達と死闘を演じたとされる場所なのである。つまり，O'Connell は併合法撤廃運動を過去のアイルランドの英雄達の戦いに重ね合わせようとしたのである。ただこの巨大集会はイギリス政府の禁止命令によって中止に追い込まれてしまう。

青年アイルランド運動の精神的指導者は Thomas Davis であったが，彼は1842年９月に機関誌 *The Nation* を創刊，これを通してあらゆる立場を超越したアイルランド民族という概念を提唱し，その根拠をアイルランドの抑圧と搾取の歴史の中に求めてゆく。彼は『我々の国家の言葉』と題された論文の中で，言語というものはその民族の歴史や風土と密接な関係にあるのだと述べ(3)，自分の言葉を奪われ他民族の言葉を押しつけられることが何を意味するのかという点について次のように語る。

> To impose another language on such a people is to send their history adrift among the accidents of translation--'tis to tear their identity from all places--'tis to substitute arbitrary signs for picturesque and suggestive names--'tis to cut off the entail of feeling, and separate the people from their forefathers by deep gulf--'tis to corrupt their very organs, and abridge their power of expression.(4)

つまり言葉はその民族にとって現在と過去の連続性を確認し，自らの存在を証明する実に重要な役割を担っているというわけである。ここで彼が我々の言葉と呼ぶのがアイルランド語であり，押しつけられた他民族の言葉が英語を意味することは言うまでもない。彼はアイルランド語を「美しい言葉」，「荒々しくかつなめらかな言葉」〝wild liquid speech〞，「我々の王と英雄達の言葉」〝the language of our kings and heroes〞と呼び，一方英語を「多くの言葉が混じりあってできた雑種」〝the mongrel of a hundred breeds〞と断定する。

Davis の口調は平明で感情に訴えるものであり，論文の最後のところで

は Brian Brou や O'Neil 一族そして O'Connell の言葉を Cromwell の言葉に置き換えるなどということは金輪際不可能だと力説している。ところがこの直後彼は突然それまでの主張をひっくり返すかのように次のように語るのである。

> But, even should the effort to save it as the national language fail, by the attempt we will rescue its old literature, and hand down to our descendants proofs that we had a language as fit for love, and war, and business, and pleasure, as the world ever knew, and that we had not the spirit and nationality to preserve it ![5]

つまり仮にアイルランド語を復活することに失敗したとしても，その文学を後生に伝えることでかつてアイルランド人にはすばらしい文学を生み出す言葉があったこと，しかし我々にはその言葉を守るだけの情熱が欠けていたことを知らしめることができると言うのだ。これは逆説的に，そんなことがないように我々の言葉を守ろうと，人々を叱咤激励しているのだと考えられなくもないが，むしろすでに瀕死の状態であるアイルランド語の現状をふまえた上で，彼の本音が図らずも顔をのぞかせたのだと考えるほうが事実に近いように思われる。事実 Davis の死とほぼ同時に始まった大飢饉はアイルランド語の消滅を決定的なものにしてしまったのである。こうして十九世紀前半のアイルランド・ナショナリズムは頓挫してしまうのだが，Davis らは大きな精神的影響を残した。つまりこれ以後アイルランドの歴史は民族のアイデンティティの拠り所として，また反英闘争のための政治的レトリックとして重要な意味を持つようになったのである。[6]

II

いわゆる文芸復興運動が始まるのは，パーネル死後の政治的混乱の中においてである。ここでは1893年に Gaelic League を創設し，Yeats 等の演

劇運動にも大きな影響を与えたDouglas Hydeの『アイルランドを非イギリス化することの必要性』という論文を取り上げたい。(7)

Hydeは先ずアイルランドの文化的不毛の現状を批判するが，その原因は無批判にイギリス的なものを受け入れながら同時にイギリスを嫌悪するという自己矛盾にあると言う。この矛盾を解消するためにはアイルランド人一人一人の心の奥底に眠っている過去のケルトの伝統を意識化し，アイルランド人としての誇りを回復することが必要なのだ。彼はイギリス人とアイルランド人は文化に対する姿勢において本質的に異なっていると主張し，仮に優れたイギリスの為政者達がアイルランドを百年間支配し，物質的な反映をもたらすかわりにアイルランド的なものをいっさい抹殺してしまうとしたら，いったいそのような取引を喜んで受け入れるアイルランド人がいるであろうかと問う。答はもちろん「ノー」である。例えば名前一つとってみても，アイルランド人なら自分の名前からアイルランド系である事を証明するO'やMacが欠落してしまう事に耐えられないはずなのだ。ではイギリス人はどうか。物質的繁栄のためなら彼らは喜んで自らの伝統も文化も捨て去ることができるだろう。

アイルランド人が自らの文化を大切にするなら，では一体現状の文化的不毛はどういうわけなのか。Hydeによれば，この文化的不毛は今世紀（十九世紀）に入ってから始まったことになる。七世紀よりアイルランドはヨーロッパ・キリスト教文化の中心であったが，十二世紀からのイギリスによる支配の間も，アイルランドの社会生活の一貫性は十八世紀まで脈々と受け継がれてきたのであり，しかもこの一貫性を担ったのは決してダブリンのプロテスタント支配者層ではなく，アイルランドの農民達であったのだ。Hydeは農民達からこの一貫性を奪った一番の原因はO'Connellおよびカソリック教会による農民への英語教育の普及であると言う。神父達が農民に英語を教え英語で説教をするようになってからアイルランド語が忘れられてしまったというのだ。同様の理由からDavisと青年アイルランド運動も批判の対象とされる。何故なら彼らは英語による新しいアイルラン

ド文学を始めた事で，結果的にはその逆の可能性，つまりアイルランド語による新しい文学の可能性の芽を摘み採ってしまったからである。

ここで注目したいのは，アイルランドの社会生活の一貫性（〝the continuity of the social life″）という言葉である[8]。彼はこれを「アイルランド的であることの一貫性」〝the continuity of the Irishism″とか「ほぼ1800年間にわたる国民的生活」〝the national life of nearly eighteen hundred years″とも言いかえているが，こうした言葉使いは，Hyde の論文を貫く二つの主張を簡潔な表現に圧縮したものと見る事ができる。アイルランドはイギリスに侵略され，支配されてはいるが，その歴史は決して単なる植民地の歴史ではなく，独自の文化的・精神的継続性を保持しているのだという主張と，その中心がアイルランドの民衆の生活，とりわけ農民の生活にあるのだと言う主張である。歴史の中に民族・国家の一貫性を求める場合，王や貴族の家系にその役割を担わせる事は困難な事ではない。イギリスの場合がその一例であろう。ところが，アイルランドの場合このような作業はきわめて困難なものにならざるをえないのである。既に見てきたようにアイルランドの支配者階級はプロテスタントの入植者たちであり，しかも彼らとてイギリス政府から任命されたアイルランド総督の顔色を窺わなければならなかったのである。名誉革命まではイギリス王がアイルランド王たりうる可能性もなくはなかったが，革命以後，イギリス議会が政治的権力を掌握してからはその可能性も全くなくなってしまった。従って Hyde が用いた「(農民の) 社会生活の一貫性」という言葉はこうしたアイルランドの歴史的問題を十分理解した上での巧みな言い回し＝レトリックとみなすことができるのである。何故なら彼は国家としての一貫性を，通常それを求める場合とは逆の方向に，つまり支配のトライアングル構造の底辺に求めているからである。Hyde の言葉は，こうしてアイルランド・ナショナリズム及び復興運動に共通する特徴と問題点を理解するための手がかりを我々に与えてくれるわけだが，けだしこうしたレトリックは政治的独立を奪われた民族が採用する一つの常套手段であろう。

このような脈絡の中で農民を捉えようとすれば，そのイメージが理想化されるのはむしろ当然である。Hyde は十九世紀の初頭までアイルランドの農民達は誰もがある程度の教養がある学者や詩人であり，ゲール語の写本を朗読して楽しむ事ができたのだと言う。もちろん彼はこのような主張が理想化につながる危険性を承知していたようで，「こうした状態が今世紀まで存在していたなどというと，誇張しているように聞こえるかも知れないが，決して誇張ではない」と断った後[9]，彼が出会ったりまた人から聞いたりした，アイルランド語を実際に話す人々の例を幾つも数え上げている。例えばカーロウ郡から仕事を探しにやってきたある男は英語を一言も話す事ができなかったとか，ダブリンで施しをしてやった乞食はアイルランド語を話していたとか，果てはカナダで出会った男はキルケニーの近くの出身者で40年間母国語を忘れないでいたため，筆者と二人でアイルランド語で会話し他の連中を驚かせたなど。しかしこうした事例はどれも特殊なものばかりで，こうした例を挙げれば挙げるほど，アイルランド語の置かれた状況が極めて悲観的であるという事が逆にますます証明されるという結果になる。なぜなら英語が話せなければ職にあぶれたり，乞食をしたりしなくてはならないという解釈も成り立つからである。

Ⅲ

前章では十九世紀に隆盛したアイルランド・ナショナリズムをその二人の精神的指導者 Thomas Davis と Douglas Hyde を手がかりとして概観した。十八世紀に始まったプロテスタント支配者階級によるアイデンティティの模索はアイルランドがイギリスへ併合された後，O'Connell や Davis らに受け継がれた。そしてその過程でアイルランドの歴史はいわば神話化され，ナショナリズムを推進するための重要なレトリックとなったのである。世紀末の文芸復興運動は，こうした地下水脈の一つの噴出形態であったと考えられるのである。

さて，こうしたナショナリズムが抱えていた，というよりそれを生み出

したとも言える根本的な問題の一つは，歴史的継続性の根拠となるべき権威の不在，アイルランド民族という概念を支えるべき主体の不在である。十九世紀は併合法によってアイルランドが政治的な独立を失い，十二世紀から進められてきたイギリスの植民地政策が完了した時期に当たるということに注目しなければならない。つまりアイルランドの歴史的継続性を支える権威がほぼ壊滅してしまった時になって，それを求める動きが始まったのである。この点は文芸復興運動，特にアイルランド語の復興という運動にも通底している。大飢饉によってアイルランド語を話す農民達が餓死したり海外へ移住したりしてそのほとんどが消滅してしまった後で，その失われた言葉を復活させようとしたからである。Hyde は農民の社会生活の一貫性という言葉によって農民の生活を理想化し，それによって歴史的継続性を支える権威の不在を一気に克服しようとしたのであるが，そのようなイメージを支える農村そのものが荒廃し不在となりつつあったのである。Hyde も Davis も共にケルトの伝説とアイルランド人の民族としての継続性を表だって主張しながら，同時にその主張を覆してしまうような言説を自らのうちに持っているということは，こうした不在を隠蔽することの困難さを示しているともいえよう。

ナショナリズム及び文芸復興運動の持つもう一つの問題点は，そこで主張されるアイルランド人あるいはアイルランド語のイメージが，長年にわたってイギリスによって作られ，押しつけられてきた類型的なアイルランドのイメージの延長線上に位置しているのではないかという点である。このイメージは普通，同じく類型的なイギリス人のイメージと対になって提示されることが多いようであるが，この点に関して Declan Kiberd は次のように述べている。

> Ever since the days of Spenser and Stanyhurst, Anglo-Saxon theorists had presented the English as a cold, refined, and urbane race, so it suited them to see the Irsih as hot-heated, rude, and garrulous ---

the perfect foil, in fact, to set off English virtues.[10]

Kiberd はこうした類型的な二分法が十九世紀ヴィクトリア朝英国の社会的コードに合致してより一層広まったと言う。中心的な規範とされるのは「イギリス人」の「男性」であり，彼らが勤勉で信頼でき，分別があって理性的であるとすれば，対するアイルランド人は怠惰であてにならず，不安的で感情的という事になる。さらにここから前者が大人で男らしいのに対して後者は子供っぽく女々しいという図式が生まれてくる。つまりアイルランド人は，ヴィクトリア朝男性優位の社会コードの中で抑圧されていた女性や子供と同じカテゴリーに組み入れられるのである。Kiberd によればこうした図式はさらに政治的な意味を帯びるようになる。何故ならアイルランド人が子供や女性と同様であるならば，それは彼らが半人前という事であり，彼らだけで独立した政府を運営するなどという事はとうてい不可能だという主張が可能になるからである[11]。

だがここで注目したいのは，こうしたイギリスによって生み出されたアイルランド人のイメージとアイルランド・ナショナリズム及び文芸復興運動が主張するアイルランドのイメージとの関連である。もう一度 Davis がアイルランド語と英語を描写するのに用いた言葉を想起しよう。彼はアイルランド語は〝wild liquid speech″であると言ったが，この〝wild″と〝liquid″というふたつの修飾語に注目してみたい。Divis はもちろんこれらの言葉をそれぞれ「荒々しく，飼い慣らされていない」，「液体（水）のようになめらかな（純粋な）」という肯定的な意味で用いている。だが，〝wild″には「野蛮な」〝barbarous″とか「でたらめな」〝disorderly″という意味が，また〝liquid″にも「不安定な」〝not fixed or stable″という意味が常に伴っている。つまり Davis の用いている言葉はイギリスがアイルランド人に与えてきた類型的で否定的なイメージを喚起する言葉にそのまま転換されうるのである。似たようなことは文芸復興運動において好んで用いられる女性としてのアイルランドのイメージにも当てはまる。例え

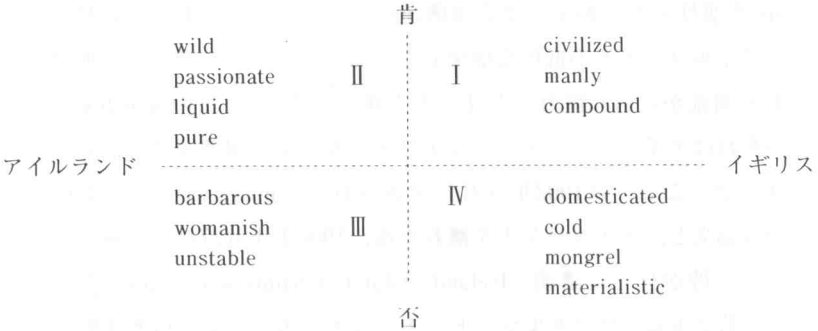
ば Yeats の *Cathleen Ni Houlihan* には侵略者に土地を奪われた老婆が登場するが，その同じ女性がアイルランドの青年達を導く，若くて美しく，しかも力強い女性に変身する。Synge の *Riders to the Sea* に登場する Maurya は，夫と息子をすべて海で失いながらも最後にはある種の力強さを感じさせるし，彼女の娘 Cathleen は男のいなくなった家を長女としてたくましく切り盛りしていこうとする。つまりこうした女性達は女性の持つ積極的なイメージ，美しさ，力強さ，たくましさと言ったイメージを強調されているのである。しかしながら彼女達には常に愚痴っぽい老婆のイメージが伴っていて，それはイギリスがアイルランドに与えた否定的イメージである女々しさにいつでも転換しうるのである。

それでは文芸復興運動の側がイギリスに与えたイメージはどうであろうか。Davis は英語を〝the mongrel of hundred breeds″と呼んだが，それは英語がアングロ・サクソン人やデーン人，ノルマン人といった多くの民族の言葉が混ざりあってできた雑種であって純粋な言語ではないのだという否定的な意味においてであった。しかしながら Joyce の批判を待つまでもなく，この雑種というイメージは，アイルランドの歴史を少しでもかじったことのある者なら，そのままアイルランド人にも当てはまってしまうことに即座に気づくであろう。また Hyde は彼の論文を，アイルランド人は自国の文化を物質的繁栄の犠牲にしないが，イギリス人は物質的繁栄を優先するだろうという仮説で始めるわけだが，結局彼の論文が明らかにするのは，十九世紀に入ってからアイルランド人は自らの手で文化を捨ててイギリス化＝物質優先主義になびいてしまったという事実なのである。雑種という概念にしろ物質優先主義にしろ決してアイルランドにとって異質な物ではなく，むしろイギリスと共有している部分なのであり，ここで問題とすべきことはそうした自分の内部にある不都合な部分を〈イギリス的〉という言葉で他者に押しつけようとしていることなのである。

Kiberd は先に見たイギリスがアイルランドに対して与える類型的イメージについてこれと同様の指摘をしている。ヴィクトリア朝の男性達は，

感情的である事や，不安定さ，子供っぽさ，女々しさといった不都合な特質をすべて女性や子供そしてアイルランド人という他者に押しつけようとしたというのである[12]。つまり類型的なアイルランド人のイメージは，実際のアイルランド人の姿というよりも，イギリス人男性の中で抑圧された彼らにとって不都合な部分の外部への投影ということなのだ。

以上の考察を整理するために次のような図式化が可能であろう。



ここでイギリス－アイルランドという座標軸は実際の言葉や民族がどうなのかという事とはほとんど関係がなく，類型化するための一つの項でしかない。イギリス側からは歴史的にⅠ－Ⅲの視点がとられてきたのに対し，アイルランド・ナショナリズム及び文芸復興運動はⅡ－Ⅳの視点を積極的に採用したのである。重要なことはいずれの視点を採用するにしろこの類型的なイメージの図式は全く影響を受けていないということである。つまりアイルランド・ナショナリズム及び文芸復興運動は結果的にイギリスの生み出した構造の再生産であったともいえるのである。

Ⅳ

1899年5月8日，アイルランド文芸座（Irish Literary Theatre）の柿落としとしてYeatsの *The Countess Cathleen* が上演されたとき，ユニヴァーシティ・カレッヂの学生で当時17才であったJoyceは，その好意的な観客

の一人であった。[13]。彼はYeatsの文芸復興運動を，当時の演劇会における不毛性と偽満に対する抗議として，自分の崇拝していたイプセンの演劇活動と期を一にする世界的な運動として捉えていたのである。従って，その後YeatsがHydeのアイルランド語による演劇を上演するなどアイルランド・ナショナリズムとの関係を強めてゆくにつれ，彼は文芸復興運動に対して失望せざるをえなかった[14]。彼は1901年10月15日，〝The Day of the Rabblement〟「騒がしい群衆の日」という短い記事を書き，その中でYeatsを裏切り者と断定，文芸復興運動がヨーロッパでもっとも遅れた民族＝アイルランド人の低俗な虚栄心とちっぽけな野心に迎合し，世界的な進歩・潮流から自ら降りてしまったと批判した[15]。この後もJoyceは折りがあればアイルランド・ナショナリズム及び文芸復興運動を批判し続けてゆくが，ここでは1902年5月に発表された〝James Clarence Mangan〟という論文と，アイルランドを離れた後，1907年4月27日に亡命先のトリエステで彼が行った講演〝Ireland, Island of Saints and Sages〟を手がかりに，若きJoyceがアイルランド・ナショナリズムや文芸復興運動の何を批判し，それをどう乗り越えようとしたのかを考察したい。

彼が先ず主張したのはアイルランドの歴史を正しく認識する事であった。既に述べたように，プロテスタント支配者層のアイデンティティを求める動きは，十九世紀を通じてアイルランド文化の独自性とアイルランドの独立を主張するナショナリズムを生み出していったが，そこではアイルランドの歴史的一貫性及び民族の文化的・言語的純粋性がセンチメンタリズムの衣をまとって強引に主張されていたのである。Joyceはその典型的な例として，十二世紀のイギリスによる初めてのアイルランド侵攻と，十九世紀初頭の併合法を取り上げる。愛国者達によればこの二つはアイルランド史におけるもっとも不吉な出来事とされていると述べた後，彼は次のような批判を加える。

But the fact is that the English came to Ireland at the repeated re-

quests of a native king, without, needless to say, any great desire on their part, and without the consent of their own king.... In addition, there is the fact that parliamentary union was not legislated at Westminster but at Dublin, by a parliament elected by the vote of the people of Ireland....

(CW.162)

アイルランドの現在の植民地的状態は，一方的なイギリスの侵略によるものではなく，アイルランドの側にも責任があるというわけだ。彼がやろうとしているのは，都合の良い部分だけを集めて作られた歴史に，そこで無視された〈事実〉〝facts″を突きつけ，歴史を相対化することである。彼はこの二つの〈事実〉について十分納得のいく説明がなされない限り，「偏見のない観察者」の立場を捨てて「確信を持ったナショナリスト」の立場を採用することはできないとする。

ただし偏見によって作られたレトリックとしての歴史を批判しながらもJoyceはイギリスの責任を不明確にするつもりは毛頭ない。アイルランドは決してイギリスの一部ではないという事をアイルランド人のイギリス女王に対する無関心を例に力説し，それを両国の間の〝a moral separation″(CW.163)だとする。そしてその違いを生み出す原因として民族的要因と歴史的要因を挙げるのである。この部分は一見Joyceが自己撞着を起こしているように見える。ナショナリストの行ったアイルランドの民族的・歴史的一貫性を批判しながら結局彼も同じところへ戻ってきてしまっているように見えるからである。しかし決してそうではないことは彼の次の言葉ですぐに明らかにされる。

Our civilization is a vast fabric, in which the most diverse elements are mingled.... In such a fabric, it is useless to look for a thread that may have remained pure and virgin without having undergone the in-

fluence of a neighbouring thread. What race, or what language (if we except the few whom a playful will seems to have reserved in ice, like the people of Iceland) can boast of being pure today ? And no race has less right to utter such a boast than the race now living in Ireland. Nationality...must find its reason for being rooted in something that surpasses and transcends and informs changing things like blood and the human word. (CW.165-7)

ナショナリスト達のようにアイルランドの一貫性を作り上げるのではなく，むしろ一貫性がないという事に積極的な意義を与えていこうというのである。「(気まぐれな意志によって氷の中に閉じこめられたアイスランド人のような場合を別にすれば) 今の世の中に，純粋な民族や言語などという物が存在するだろうか」という彼の言葉は，前章でみたようなイギリス－アイルランドという硬直的なイメージの図式を解消するコスモポリタンの視点である。イギリスの歴史的責任とアイルランドとの差異を認めながらも，Joyce はあくまで〝blood″ (民族の血) や〝humand word″ (おそらくここでは書かれた歴史) に国家の一貫性を求める姿勢を，事実に基づかない非科学的な態度であるとして批判しているのである。

しかしながら，こうした Joyce の主張は重大な問題を含んでいる。事実をつきつけることで作られた歴史を批判する事はある意味では簡単だが，E. H. Carr の言葉を持ち出すまでもなく，事実はあくまで材料でしかなくそれが歴史になるには，結局誰かがそれを解釈し言語化する，つまり書く作業をしなければならないのであり，さらに Joyce がナショナリストを攻撃するために用いた事実も誰かが解釈し書き残した物であるはずなのだ。つまり，事実を突きつけ相手の書いた歴史を批判することは極端な場合，際限のない破壊と再構成を生み出すことになるのである。

結論から言えば，Joyce はこの問題を十分に理解していたと思われる。彼はそのような破壊と再構成こそ単なる事実よりも重要な事なのであり，

新しいアイルランドを生み出す原動力となると考えていたようなのである。このことは，アイルランド人ほど非純粋な民族はなく，歴史的にあらゆる雑多な物を包含してきた結果，その中から新しい存在〝new entity〟が生まれてきたのだとした上で，それをあえてケルト民族の一脈ととらえようとする彼の主張にも現れている。つまりJoyceはアイルランドのアイデンティティを，そこから非アイルランド的なものを捜し出して排除する事によってではなく，逆にあらゆる異物を飲み込んだ状態のままそれを再構成した，全く新しいアイルランド像に見いだそうとしたのである。民族的・歴史的継続性の不在，イギリスのような権威としての伝統の不在こそアイルランドのアイデンティティを生み出す場になると考えたのだ。だがこのような態度は，もはや歴史家のものではないだろう。彼にとって歴史的〈事実〉は，ナショナリストが作り上げた貧弱な歴史のパターン＝神話を粉砕するための道具でしかなく，本質的に重要な概念ではなかったのである。

Joyceは，このようなアイルランドの歴史観を自らの芸術創作にどのように関係づけようとしたのであろうか。文芸復興運動においてその先駆的役割を担っていたとしてもてはやされたJames Clarence Manganについての論文のなかで，Joyceは詩のあるべき姿と歴史との関わり方について次のように述べている。

> Poetry.... is often found at war with its age, so it makes no account of history, which is fabled by the daughters of memory.... No doubt they are only men of letters who insist on the succession of the ages, and history or the denial of reality, for they are two names for one thing, may be said to be that which deceives the whole world.
>
> (CW.81)

歴史は記憶の娘達〝daughters of memory〟によって生み出された作り事に

すぎず，時代の継続性は文筆家〝man of letter〟－おそらく創造的詩人への対立概念であろう－の作り事でしかない。歴史とは〈真実〉〝reality〟の否定であり，世界を欺くものであるというわけだ。ここでいう歴史とは，ナショナリスト達によって作られた偏狭な歴史を指していることは明白であろう。問題なのは〈真実〉－事実ではない－という言葉が何を意味するのかという点であるが，これについては同じ論文の最後で次のように述べている。

> Beauty, the splendour of truth, is a gracious presence when the imagination contemplates intensely the truth of its own being or the visible world, and the spirit which proceeds out of truth and beauty is the holy spirit of joy. These are realities and these alone give and sustain life.... In those vast courses which enfold us and in that great memory which is greater and more generous than our memory, no life, no moment of exaltation is ever lost. (CW.83)

〈美〉〝beauty〟と〈真理〉〝truth〟が〈想像力〉〝imagine〟によって観想されたとき，そこから〈喜びの聖霊〉〝the holy spirit of joy〟が生まれる。おそらくJoyceはこうした〈美〉〈真理〉〈想像力〉〈喜びの聖霊〉をすべてまとめて〈真実〉と呼んでいるのであろう。これらの〈真実〉が生命を生み育てると言うのである。またここでは前出の「記憶の娘達」という言葉に対して〝great memory〟「偉大なる記憶」という言葉が導入されている。前者が，我々にとっての一般的な意味での歴史を生み出す記憶であるとすれば，後者はそれよりももっと広い意味での，おそらく芸術的な創造性をも含み込んだ概念である。生命を生み育てる〈真実〉はこの「偉大なる記憶」と深く関わっているように思われる。

こうした説明は極めて観念的であるが，Joyce自信のオリジナルな考えというよりも，プラトニズムやBlakeそしてYeatsらの神秘思想を彼なり

にアレンジしたものであろう。おそらくこうした一連のイメージに何らかの秩序だった関連や，機械的な因果関係を求める事は，このイメージのそもそもの本質を破壊することになってしまうように思われる。誤解を覚悟であえて彼の主張を要約すれば，人間の過去の記憶を集めて作り出される歴史と，その結果としての国家という表面的な枠組みにとらわれる事なく，それを超越したより根源的な記憶に自らの想像力によって到達すべきだという事ではなかろうか。そしてこの主張はそのまま若き Joyce の芸術創造のための理論の一環をなしていたはずである。

結　　び

プロテスタント支配者層のアイデンティティ探求にその根源を持つアイルランド・ナショナリズム及び文芸復興運動は，その本質において，歴史的継続性の不在と，アイルランド民族という概念を支えるべき主体の不在を如何に克服するかという課題を抱えていたと言える。Joyce はこの課題を不在こそアイルランドの本質であるとして一気に克服しようとしたのである。〝Ancient Ireland is dead just as ancient Egypt is dead″ (CW.173) と述べ，また Mangan の死にケルト的吟遊詩人の伝統の終焉を見ることで，Joyce はアイルランドの不在を明確化し，ナショナリストや復興家達から自らを切り放そうとした。この過程で彼は歴史的事実によってレトリックとしてのアイルランドの歴史を粉砕したが，彼が最終的に求めたのは単に正しい歴史認識をせよという事にとどまらず，むしろ歴史の超越なのである。こうしてアイルランドとその歴史は，Joyce の芸術を拘束する足枷ではなく，その材料として，解体と再構成の場に運び込まれるのである。

NOTES

1. James Joyce, *Dubliners* (1967 ; London : Jonathan Cape, 1982), p.216.
2. Declan Kiberd, " Irish Literature and Irish History ". *The Oxford Illustrated History of Ireland*. Ed. R. F. Foster, (Oxford : Oxford Univ. Press, 1989), p.299.

3. Thomas Davis, " Our National Language " Part I. *Irish Literature : A Reader*. Eds. Maureen O'Rourke Murphy and James Mackillop, (New York : Syracuse Univ. Press, 1987), p.127.

4. Ibid., p.127.

5. Ibid., p.129.

6. アイルランドの歴史が政治的レトリックとして用いられることについては, Foster の指摘を参考にした。(R. F. Foster, " Ascendancy and Union ". *The Oxford Illustrated History of Ireland*, p.189.)

7. Douglas Hyde, " The Necessity for De-Anglicising Ireland " in *Irish Literdture : A Reader*.

8. Ibid., p.141.

9. Ibid., p.143.

10. Declan Kiberd, p.310.

11. Ibid., p.313.

12. Ibid., p.313.

13. Richard Ellmann, *James Joyce* (1959 ; N.Y., Oxford, Tronto ; Oxford Univ. Press, 1982), p.67.

14. Ibid., p.88.

15. Ellsworth Mason and Richard Ellmann, eds., The Critical Writings of James Joyce (1959 ; N.Y.: Cornell Univ. Press, 1989), pp.70-71. (本書がこの論文に引用される場合 CW と略して示す。)